

■「フリーメーソンの神秘」

フリーメーソンに光を当て、モーツァルトの声楽曲を集めたレクチャーコンサートで、ソプラノの中嶋彰子が司会から招待研究者の通訳まで大活躍。グローバルなキャリアを積んだ人物には格別なオーラがある。強いのに暖かい。ウィーンのサロンコンサートさながら、愉しく教養を高める好機となった(11月3日、大阪市のいずみホール)。

ウィーンに出たモーツァルトは、啓蒙主義の理想を実践する秘密結社フリーメーソンに入会。「自由、平等、友愛、寛容、人道」の普及のために幾つかの作品を書いたが、オペラ「魔笛」以外には表立って知られることは少ない。

プログラムの中心に置かれた「3つのフリーメーソンの歌曲」は、全会員が歌えるよ



中嶋彰子④とライナー・トロスト⑤=写真 樋川 智昭

モーツァルトに愉しく迫る

うにテノールの有節形式が基本だが、「無限なる宇宙の創造者を崇拜する汝らが」だけは叙唱とアリア形式。同時期の「魔笛」からのこだまが印象的だ。ライナー・トロストの歌唱は、「すみれ」や「春の初めに」などの小曲も含め、的確な様式感と潔癖な響きで傑出しているが、もう少し声色の変化が欲しいことも。

中嶋彰子は確信に満ちた劇的表現の密度において、他の追従を許さない。特に「フィガロの結婚」の「愛の神よ、照覧あれ」では極上の気品が輝いた。ただバード風の「魔術師」などは練り上げが今ひとつ。トロストとの二重唱では「イドメネオ」からの「私には言葉では言えません」の情感豊かな同質性、「魔笛」のパミーナとパペゲーノの、身体に染み込んだ豊穡な芸風に打たれた。

フリーメーソンの教えに倣えば「スター歌手、いやそれ以上に人間なのだ」。いずみホールの3年企画「モーツァルト 未来へ飛翔する精神」。その2年目のテーマ「充溢」への扉を開く叡智が光った。

(音楽評論家 藤野 一夫)